結城入道墮地獄事

中ニモ結城上野入道ガ乘タル船、惡風ニ放サレテ、渺々タル海上ニユラレタヾヨフ事七日七夜也、既ニ大海ノ底ニ沈カ、羅刹國ニ墮カト覺シガ、風少シ靜リテ、是モ伊勢ノ安野津ヘゾ吹著ラレケル、

〔安東郡專當沙汰文〕元德（後醍醐）元年己巳十一月注之○略中

一毎年五月五日節供料、御田半之丁部面々方ヨリ干名吉一隻宛上之間、專當使郡令入部、五月一日、安乃津市ニテ大略取集之歟、

〔大神宮參詣記〕康永元年十月十日あまりのころ、大神宮參詣のこゝろざしありて、伊勢のくに安濃津と申ところに著て侍りし程に、故郷にて聊見侍りし人のとゞめ申しかば、旅の心をもたすけむとて、兩三日逗留し侍りぬ、この津は江めぐり浦はるかにして、ゆきゝの船人の月に漕こゝろ、旅泊の曉の枕にきこえて、あらき浪風の音しのびがたく侍りしかば、

かせ寒き磯やのまくら夢さめてよそなる波にぬるゝ袖哉

〔日本書紀通證（彙言）〕三津

安濃津、明應中地震後、津遷江淺、而大船難泊矣、

〔伊勢參宮名所圖會（三）〕津

明應三年五月七日、同七年六月十一日、兩度の大地震に、安濃津十八九丁沈沒せるによつて、今の地へ移さる、

○按ズルニ、明應三年五月七日ノ地震ノ事ハ、後法興院記、和長卿記、大乘院寺社雜事記等ニ見エ、同七年六月十一日ノ地震ノ事ハ、御湯殿上の日記、後法興院記等ニ見エタリ、

〔內宮子良館記〕今度大地震ノ高鹽ニ、大湊ニハ千間餘、人五千人計流死ト云々、其外伊勢島間ニ、